

メールマガジン「ガゼッタ」まとめ(5)

第 21 号～第 25 号 (2013 年 3 月 15 日～4 月 25 日配信)

配信した「ガゼッタ」No.21-25 のまとめです。書式と一部表記を変更して図版を取り込み、pdf にしました。



◆ガゼッタ第 21 号◆

ガゼッタ第 21 号をお届けします。

本号は、「2013 年 ROF チケットの申し込みについて」「お薦めディスク：パエールの歌劇《レオノーラ》」に続いて、連載『オペラの日本初演をめぐって』第 4 回を掲載します。

▼2013 年 ROF のチケット申し込みについて▼

今年の ROF のチケット申し込みについて、お知らせします。ROF 友の会 (Amici e Sostenitori) メンバーの優先申し込みは 3 月 25 日開始、一般申し込みは 4 月 29 日から 6 月 14 日まで。こちらは郵便、ファクス、E メールによる受付で、電話受付は 7 月 1 日から 26 日までとなります。

詳細や問い合わせ先は、次の ROF ブッキングをご覧ください。

英語版 <http://www.rossinioperafestival.it/?IDC=148>

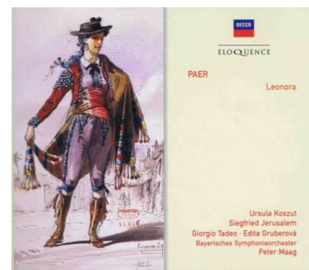
イタリア語版 <http://www.rossinioperafestival.it/?lang=ita&IDC=148>

▼お薦めディスク：パエールの歌劇《レオノーラ》▼

◎Ferdinando Paer : Leonora, ossia L'amore coniugale

パエール：歌劇《レオノーラ、または夫婦の愛》

ペーター・マーク指揮バイエルン交響楽団 ウルスラ・コシュト(S) エディタ・グルバローヴァ(S) ジークフリート・イェルザレム(T) ジョルジョ・タデオ(B)
ほか Decca[Eloquence] 480 4859 (CD2 枚組) 1978 年録音の初 CD 化



ロッシーニの先輩作曲家として筆者が以前から関心を寄せているのがフェルディナンド・パエール [パーエル] (1771-1839) です。影響の一端は、拙稿「ロッシーニのポラッカとパエールのアリア」でも明らかにしておきました。HP 掲載の論考はこちら。<http://societarossiniana.jp/polacca.2010OCT.pdf>

残念なのはパエールのオペラの CD がきわめて乏しいことで、重要作品は今回発売された《レオノーラ、または夫婦の愛》が初と言っても良いほどです。この作品はベートーヴェン《フィデリオ》と同じ原作で、物語も全く同じ。初演はパエールが 1 年早く、その楽譜を知るベートーヴェンが影響を受けたことでも知られ、音楽には《フィガロの結婚》の影響が聴き取れるなど、さまざまな意味で興味深い作品です。若きロッシーニがこのオペラを知っていたかどうかは不明ですが、モーツァルトとロッシーニの間に作られた名作としてお薦めしておきます。なお、これは 1978 年に録音されて LP 発売されましたが、CD 化は今回が初となります。

▼『オペラの日本初演をめぐって』(連載第 4 回：《ランスへの旅》)▼

フランス王シャルル 10 世の戴冠祝いに作られた《ランスへの旅》は、上演用の楽譜素材が失われて「幻」のオペラとなっていました。ロッシーニ財団の研究者たちの手で復元され、1984 年 8 月 17 日に ROF で蘇演されました。日本初演は 1989 年のウィーン国立歌劇場来日公演(初日は 10 月 21 日。演出：ルカ・ロンコーニ、指揮：クラウディオ・アッパード)、邦人初演は 2000 年 11 月 16 日に日本ロッシーニ協会が設立 5 周年を記念して行いました。

このように、「世界蘇演」「日本初演」「邦人初演」の三つは明確ですが、数年前ある人から、「日本初演は 1992 年に関西で行われているんですよね」としたり顔で言われました。私は即座に、「ああ、知ってます。でもあれはピアノ伴奏で、しかも違法な海賊上演。それを堂々と日本初演なんて言っているんですか？ ロッシーニ財団やリコルディ社から訴えられても知りませんよ！」と答えると、相手は黙ってしまいました。

ごく一部の人は知らぬ事実もネット時代には情報として広く流布しますので、今ここで真実を明らかにしておきましょう。

1971 年に設立された「関西カゲキ派」と称するグループが、1992 年の第 20 回公演でピアノ伴奏による《ランスへの旅》の演奏を行った……それは事実です。でも当時は楽譜が未出版でした。なのにどうして彼らはそれを演奏できたのでしょうか？ 答えは簡単、1989 年にウィーン国立歌劇場が来日して日本初演した際に、「関西カゲキ派」の関係者がウィーン国立歌劇場合唱団のメンバーからピアノ伴奏譜を借りてコピーしたのです。まあ、研究用に内緒でコピーして個人で隠匿するなら、目くじらをたてるまでもないでしょう。でもそれを使って演奏し、

歌った若きポーランド人ソプラノ、クルザクによるロッシーニ・アリア集です。収録曲は《セミラーミデ》《ギヨーム・テル》《タンクレディ》《マティルデ・ディ・シャブラン》《セビーリャの理髪師》《シジスモンド》《イングランド女王エリザベッタ》《イタリアのトルコ人》の代表的アリアですが、ドニゼッティ《カレの包圍》のアリアも1曲歌われています。

筆者はクルザクの実演に接した記憶がなく、このCDも3月31日入荷予定とあって声と歌唱に関して何も言えません。2011年春以降クルザクはロッシーニのオペラに出演しておらず、ルチーア、ミミ、ヴィオレッタ、ジルダの路線を歩んでいます。ロッシーニ・ファンにとって気になる存在であるのは間違いのないでしょう。4月には他にもさまざまなロッシーニの新譜が登場しますが、あまり先取りせず、順次取り上げることにします。

▼『オペラの日本初演をめぐる』(連載第5回:《オリイ伯爵》)▼

ロッシーニが1828年にパリ・オペラ座で初演した《オリイ伯爵》は、フランス語の喜歌劇の歴史に新たな幕を開く画期的な作品となりました。けれども1880年代にいったんレパートリーから外れて幻のオペラとなり、20世紀の復活は1947年10月25日ローマのRAIホールにてイタリア語版で行われ、オリジナル・フランス語の復活上演は1954年8月22日にエディンバラのキングズ劇場で行われました。

日本初演は東京オペラ・プロデュースが1976年6月25・26日に東京郵便貯金ホールで行った公演です(指揮:尾高忠明、演出:佐藤信。「オリイ伯爵 あるいは仏蘭西好色一代男」の題名で上演)。前記復活上演から僅か29年ですから大したもの。しかも、この団体は前年誕生したばかりでした。とはいえこれは中村知子の訳詞による上演のため、「訳詞による日本初演」に当たります。

オリジナル・フランス語での日本初演は20年を経た1997年9月17・18日、同じ東京オペラ・プロデュースが北とびあ・さくらホールで行いました(指揮:エンリーケ・マツォーラ、演出:松尾洋。プログラムは右図参照)。

このとき筆者はプログラムの作品解説以外にも、上演に貢献しています。というのも同団体がフランス語上演用に借りた楽譜の歌詞がすべて手書きで使い物にならず、歌手たちは筆者の提供したフランス語のピアノ伴奏譜(19世紀半ばのブランデュ版)をそっくりコピーして使用したからです。筆者はピアノ伴奏譜の初版(1828年)も持っていました。初版は誤りが多くコピーしづらいこともあって第2版に当たる楽譜を提供しました。ちなみにKalmus社の上演用貸譜はこのオペラの初版総譜を原本としながらオリジナルの歌詞をすべて消し、イタリア語の歌詞が手書きされていますからわけが判りません。

他にも1992年3月にオペラ振興会オペラ歌手育成部が修了公演に《オリイ伯爵》を取り上げ(日本都市センターホール。イタリア語版)、2009年7月に南條年章オペラ研究室が津田ホールでピアノ伴奏のオリジナル・フランス語版による演奏を行っていますが、本格的な上演は前記東京オペラ・プロデュースの1976年「訳詞による日本初演」と1997年「原語による日本初演」が唯一です。それゆえ来年の藤原歌劇団公演は日本で3番目の本格上演となりますが、「〇〇による日本初演」となるかどうかは現時点で未定です。



◎追記: 藤原歌劇団の邦題《オリイ伯爵》について

ガゼッタ第18号(2月15日配信)に、来年藤原歌劇団が《オリイ伯爵》を《オリイ伯爵》の邦題で上演すると書きました。その際、「Ory」を「オリイ」とするのは原語の発音や国語審議会の答申(「外来語の表記」平成3年)に照らして不適切なので、この件について藤原歌劇団の関係者に話し、結果は「後日このメールマガジンで報告させていただきます」としました。

その段階では間違いを指摘すれば改まると単純に考えたのですが、その後、藤原歌劇団による《どろぼうかささぎ》や《オリイ伯爵》がNHKの作品表記に準拠している事実気づきました。以前筆者が藤原歌劇団の関係者に「なぜ全部ひらがなで《どろぼうかささぎ》としたのか?」と質問したときは、「公演監督が決めたからで、それ以上は知らない」と言われただけで。今回も公演監督が決めたと思いますが、単にNHK表記に倣っただけならとやかく言っても仕方ありません。まともな人間なら、「Oryをオリイと書くのはパリ(Paris)をパリイと書くのと同じ過ち」、「リはイの母音を含むから、1音節のryやriをリイとするのは発音から言っても間違い」と説明すればすぐ判るはずですが、相手が人間ではなくNHKという組織なら話になりません。そして藤原歌劇団が単にNHK表記に準拠した(らしい)のなら、問題点を指摘しても埒があかないでしょう。というわけで、この件での藤原歌劇団への問い合わせや再考願いは諦め、放置することにしました。

ちなみにNHKはかつて「ベルディ」一辺倒でしたが、近年は「ヴェルディ」も使っています。これは放送用語委員会が外来語の発音と表記に関する検討を重ね、かつて不可とした表記を可とするなど、時代に沿った表記を採用(もしくは許容)し始めた結果です。いずれ不適切かつ間違いである「オリイ」も是正され、「オリイ」もしくは「オリ」になるでしょう。藤原歌劇団の関係者には、そうした点も含めて21世紀にふさわしい邦題の採用を願うばかりです。そうでないと、藤原歌劇団が日本オペラ界の「化石」みたいになってしまいますから。

(2013年3月25日 水谷彰良)

★HP管理人より★

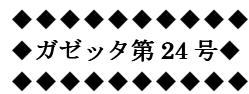
毎月HPの更新をしていますので、時々HPをチェックしてみてくださいね。<http://societarossiniana.jp>

好評を得た東京オペラ・プロデュースは、翌 1990 年に日本都市センターホールと新神戸オリエンタル劇場でこれを再演し、続いて 1992 年 9 月、ロッシーニ生誕 200 周年を記念して原語日本初演を行いました（会場はパナソニック・グローブ座）。つまり、僅か 3 年間に同じ団体が 4 回取り上げ、訳詞初演と原語初演の双方を行ったのです。とはいえ上演楽譜は 19 世紀のエディションを編集して用い、管弦楽も小編成に縮小されていました。

これとは別に、《オテッロ》のもう一つの日本初演が行われています。それが 1996 年 4 月 18 日、サントリーホール 10 周年の記念公演です。これはロッシーニ財団の批判校訂版による日本初上演で、指揮/演出: グスタフ・クーン、オテッロ: ジェームズ・ワーグナー、ロドリゴ: パトリツィオ・サウデッリ、イアーゴ: エンリーコ・ファッチーニ、デズデーモナ: ダニエラ・ロンギほか、とソリストはみな外国人歌手でした。しかもたった一度の公演で、開幕に先立ち「オテロ役のワーグナーが風邪でコンディションを崩していますが、歌います」とのアナウンスもありました。さほど不調との印象は無く、二重唱のハイ D を歌わないことへのエクスキューズかな、と思ったことを覚えています。

その後、2000 年 7 月に東京オペラ・プロデュースが批判校訂版を用いて再演し（会場は新国立劇場中劇場）、2008 年 11 月にはロッシーニ・オペラ・フェスティバルの来日公演でも演目とされました（会場はびわ湖ホールとオーチャードホール）。それゆえ本邦初演から 11 年間に合計 7 回の上演機会を得たこの作品が、結果的に日本で最も数多く上演されたロッシーニのオペラ・セーリアとなりました。

(2013 年 4 月 5 日 水谷彰良)



ガゼッタ第 24 号をお届けします。

本号は、「マイアベア《ディノーラ》ハイライトを含む演奏会 (5 月 19 日)」「京都オペラ協会による《アルジェのイタリア女》上演 (6 月 23 日)」に続いて、連載『オペラの日本初演めぐって』第 7 回を掲載します。

5 月 12 日の例会案内はこちらをご覧ください。 <http://societarossiniana.jp/meeting.html>

▼マイアベア《ディノーラ》ハイライトを含む演奏会 (5 月 19 日) ▼

5 月 19 日、大泉学園ゆめりあホールにて、会員の西尾京子さんがディノーラを歌うマイアベア《ディノーラ (プロエルメル巡礼)》ハイライトを含む公演が行われます (ピアノ伴奏による演奏会形式、原語・字幕解説付き)。《ディノーラ》は 1 時間程度のハイライトで、他にグノー《ロメオとジュリエット》などが演奏されますが、ヨーロッパでもなかなか聴く機会のない作品とあってマニアックなオペラ・ファンに歓迎されることでしょう。主催アトリエ・デュシャンの HP はこちら <http://www.atelier-d-c.com/ateliermember.html>

以下、西尾京子さんからいただいた案内文を転載します。

「来月 5/19 日に大泉学園にて、フランスオペラの会に出演いたします。1 年間少しずつ取り組んできた、マイアベアのディノーラという珍しく、楽しい作品の最終回です！ フランス語なのにドイツ風の激しいコロラトゥーラ、聞き所満載ですのでぜひご来場くださいませ。」

2013/5/19 (日) 19:00 開演 アールリリック'13 前期-1

マイアベア『ディノーラ (プロエルメル巡礼)』ハイライト演奏会形式 原語・字幕解説付き

@大泉学園ゆめりあホール 自由席 3,000 円

指揮・監修: 村田健司 ピアノ: 門 真帆 ディノーラ: 西尾京子 ホエル: 笹倉直也 コランタン: 高島伸吾
山羊飼いの娘: 尾崎千鶴 藤田あゆみ

▼京都オペラ協会による《アルジェのイタリア女》上演 (6 月 23 日) ▼

日本ロッシーニ協会とは何の関係もありませんが、6 月 23 日「第 6 回長岡京音楽祭」にて、京都オペラ協会が《アルジェのイタリア女》を上演します (イタリア語上演。日本語字幕付)。

6 月 23 日 (日) pm3:00~京都府長岡京記念文化会館

全自由席 一般 4,000 円/小学生~大学生 2,000 円 (当日 500 円増)

総監督・演出: ミッシェル・ワッセルマン 指揮: 小崎雅弘 オーケストラ: 京都オペラ管弦楽団 合唱: 京都オペラ合唱団

主催の京都府長岡京記念文化会館による告知はこちら <http://www.nagaokakyo-hall.jp/top.html>

京都オペラ協会の HP はこちら <http://www.nagaokakyo-hall.jp/contents/sub/opera/koen/index.html>

京都府長岡京記念文化会館の HP にはチケットが「4 月発売予定」「詳細は決定次第、掲載します」とあるだけで、京都オペラ協会の HP も含めどこにもキャストが書かれていません。なんか不思議。でも、《セビーリヤの理髪師》以外の作品が日本で上演される機会は乏しいので、京都府とその近郊のロッシーニ・ファンは足を運んでみてはいかが？

詳細はこちら。<http://www.gcenter-hyogo.jp/siviglia/ticket/index.html>

なお、来る5月16日(木)には芸術文化センター阪急中ホールにて、当協会の新・運営委員でもある朝岡聡さん(フリーアナウンサー/オペラ・ソムリエ)によるワンコイン・プレ・レクチャー第1回「行こう!セビリャの理髪師〜ロッシーニ魅惑のレシピ」が開催されます。当協会会員のベルカント・テノール・中井亮一さんの演奏付きです(ピアノ:高崎三千)。プレ・レクチャー第1回の詳細はこちら。

http://www1.gcenter-hyogo.jp/sysfile/html/01_shousai/4252412102_0000000001.html

◎11月30日、12月1日 名古屋二期会《セヴィリアの理髪師》

年末にはもう一つのプロダクションによる公演があります。それが名古屋二期会《セヴィリアの理髪師》。11月30日(土)と12月1日(日)に愛知県芸術劇場大ホールで行われます。現在知りうるのは、指揮:園田隆一郎、演出:中村敬一、管弦楽:名古屋二期会オペラ管弦楽団のみです。

情報源は「名古屋二期会 友の会」サイト。<http://www.nagoya-nikikai.jp/tomonokai.html>

まだ4月。これから発表される国内公演もあるとは思いますが、現状では「どんだけ〜?」の問いに「こんだけ!」としか答えられません。面白いのはすべての公演が中部&関西圏で行われること。名古屋人と関西人はロッシーニがお好き?……なんかオモロイですね。

でも、秋には東京で日本ロッシーニ協会が前回の《セミラーミデ》に続いてロッシーニのオペラ・セーリアのピアノ伴奏セレクションを予定しています。ピアノ伴奏の抜粋でも、オペラ・セーリアを取り上げられるのは当協会だけではないかしら? その意味でも、日本ロッシーニ協会の存在意義は大きいと自負しています。

(2013年4月25日 水谷彰良)